

論文の内容の要旨

論文題目 現代中国における葬儀改革に関する研究—追悼会、火葬、公墓の民族誌的考察

氏名 田村 和彦

近現代の中国において、国民国家形成へ向けた模索と、その後の社会主義国家の成立と展開のなかで、個人の死をめぐる取り扱いにおいても大きな変化が現れ、その改革運動は現在も進行している。この変化を促す運動は、「殯葬改革」(*binzanggaige*、以下「葬儀改革」と呼ばれる。

従来の中国の文化人類学的葬儀研究では、この変動をおもに個別の民間の慣習の叙述、世界観研究、地域社会と国家の関係、ミクロな政治の発生する場の問題として読み解いてきた。先行研究では、「葬儀改革」は社会主義化以降の、あるいは改革開放時期以後の変化としてその叙述の一部に加えられるに過ぎない。他方、民俗学、社会史などの分野では個別の研究が蓄積されているが、これらの改革を総合的な視野から研究したものは少ない。歴史的な資料を含めつつおこなった共時的な分析という意味では、ほとんどないといってよい。

本論文では、現代中国における死の社会形成と現在のありようを考察し、画一的な政策が多様な現象としてあらわれるメカニズムを検討することを最終的な目的とした。そのために、現在まで続く葬儀改革の主要な3つの領域である、1)「追悼会」(*zhuidaohui*)と呼ばれる新たな儀礼形式、2)1949年以降は特に無神論の実践として普及した「火葬」(*huozang*)という遺体処理方法、3)近代衛生観念の普及とともに形作られた、血縁に基づかない個人としての資格による公共の墓地である「公墓」(*gongmu*)を考察対象とした。「公墓」には、

主に都市部の住民によって商品として購入される公墓（「経営性公墓」*jingyingxinggongmu*）と、農村部における遺体あるいは遺骨が埋葬可能な農村部の公墓（「公益性公墓」*gongyixinggongmu*）がある。

本研究では、共時的な参与観察を中心としつつも、近過去の資料を取り込むことで現在の現象にいたる変遷の過程に留意した。「追悼会」が挙行される殯儀館、この場所に付設される火葬施設、都市部の「経営性公墓」、農村部の「公益性公墓」という異なる場での多点的なフィールドワークをおこなった理由は、これらの空間が、それぞれの目標として、親族、家族に取り囲まれた人間をそこから切り離し、個人を直接に国家と向き合わせる死のありかたを目指す政策として統合され得る一連の政策としての方向性を有するためである。本研究では、各種の死を位置づけてゆく空間を考察対象とすることで、それぞれ個別の研究を積み上げることで明らかなにし得なかった現代中国の死に関する政策群と、現場で発生する実践をより大きな文脈に位置づけ、新たな議論の場を形成することを目指した。

第1章では、国家による直截的な死の意味の表明機会である新式葬儀「追悼会」をとりあげた。そこでは、清末以来、国民国家形成のなかで、従来もっとも日常的で基準となるべき人間関係である家族から葬儀が切り離され、個人と国家が直接向き合う死の儀礼が創造されていたことを確認した。この儀式は、所与の紐帯を断ち切り、革命を目的として集合した、均質であることが期待された人々によるコミュニティで完成をみた特殊な葬儀であるにもかかわらず、この様式が新たな国民儀礼として普及することが企図された。しかし、中華人民共和国が「人民」概念へと傾き、国境内に生きる人々をすべて「国民」としてとりあつかうことに失敗したことと同様に、新たな死の儀礼も人々にある程度の均質性が保たれた時代にはその意義が認められ浸透しつつも、改革開放時期になると多様化した人々のありように対応できず、また農村部の葬儀を刷新できなかった。その結果、当初の意図は果たされないう形で、緩やかに定着することとなったことを確認した。

第2章では、火葬現場のフィールドワークの成果を中心に議論した。近代中国においては、科学的火葬は、当初、遺体の搬送が困難な外国人により取られた手段に過ぎなかったが、科学的、合理的、そして衛生的な新たな葬法として登場した。中国共産党政権が陝西省北部の辺区政府であった時期には、この葬法は、設備の必要性から葬儀改革の議論には含まれていなかったが、上海や北京、南京といった大都市を手中に収めることで実現可能となった。遺体を焼却するという旧慣、礼教への強烈な批判行為は、神霊的存在を否定し、人間の幸福は労働によってのみ訪れるという世界観の表明、思想の可視化にこの上ない手段となったことを示した。そのため、葬儀改革の主要な項目のなかではもっとも遅くに登場したにもかかわらず、火葬は、葬儀改革の浸透を示す指標とみなされていた。しかし、現在の火葬現場へ注目すると、思想の表明といった側面とは全く異なる状況が見いだせる。本章では、火葬従業員の仕事に焦点をあてることで、経験に基づいて新たな認知様式が創出され、新規参入者に伝達されていることを指摘した。従業員たちは、作業の過程で獲得された認知様式に準拠することで新型の機械設備のもつデフォルトなシステムを否定し、改造を加えて既存の

身体知に寄り添わせいた。本章では、知識や技術が作業者の身体に依存し、時に設備の改造をすることで逸脱する人々の活動によって、火葬という新技術が運用され、葬儀改革が支えられていることを指摘した。

第3章では、2つの公墓の利用状況から、葬儀改革過渡期にある地方都市の墓地利用のありかたを論じた。まず、個人の資格によって埋葬される集合墓地の系譜を、中華民国時期に形成された都市部における商品としての公墓の系譜と、国家による顕彰系の公墓の系譜が交差する形で発展したことを明らかにした。これらは、「義冢」と呼ばれた公共の無祭祀墓地の記憶とも結びつきつつ、現在の集合的にして、公共性ある墓地へと変形してきたことを明らかにした。そのうえで、新たな公墓の普及途上にある内陸部の2つの地方都市の公墓埋葬者を事例に、葬儀改革が提唱する墓地の利用推進の目的と、公墓利用者による実際の埋葬事例とのずれを指摘した。葬儀改革の途上にある地方都市では、利用者には地域に広く定着する大規模な親族組織といったネットワークを欠如している人々、または、祭祀継承者をもたない、あるいは継承が途絶える可能性の高い若年死亡者の埋葬が有意に多いことが確認できた。

第4章では、公墓案内所における公墓の販売を担う従業員と購入希望者を対象に、墓地販売のための小冊子を分析対象として、販売者と購入希望者との間にある民間知識の共有性を検討した。死者の安置に関する知識は、一揃いの体系的な知識として存在するのではなく、断片化され、いくつかの明示的、暗示的な言葉によって表現されている。従来より重要性が指摘されてきた「風水」(*fengshui*)だけでなく、購入希望者には合法性、永続性への高い関心がみられた。ここで意味する合法性、永続性とは購入した商品が無効化されることを恐れるだけではなく、死者の埋葬後に再び墓を改める必要がないことへの強い希求の表現形式である。この希求は、墓地を再度掘り起こすことが想起させる災因論的背景を反映すると同時に、死者を「正しく」安置することでよき人たろうとすること(故人と子孫との関係でいえば「孝」*xiao*)が公墓の購入という行為において強く作用しており、ここに旧慣を再編しながら新たな行為基準「孝」が紡ぎだされる状況を指摘した。

第5章では、農村部の墓碑建立運動を対象とし、墓碑に結集する人々の範疇である「孝子」(*xiaozi*)について議論した。中華人民共和国時期以降、人間関係の大規模な再編が求められ、親族、家庭は繰り返し再編すべき対象として大きな介入を受けてきた。儒教に基づく人間関係規範の破壊が試みられ、調査村落では旧来の「祖先」(*zuxian*)に関する文字記録を失った。改革開放時期になると、社会主義時代に普及が試みられた人間観のうえに、さらに新たな関係性を構築することとなり、この再構築は現在も進行している。本章では、墓碑への記名をめぐる表現される人間関係の1つである「孝子」に着目し、立碑の場で顕在化する人間関係の範疇とその揺らぎを考察した。調査した村落の墓碑は、個々人がそれぞれに建立するために各墓碑に記入される対象は同一ではないが、1949年以前に作成された墓碑と比べ、記載される「孝子」の範囲が拡大している状況を指摘した。しかし、「孝子」の範疇は無軌道に拡大するわけではなく、女性、傍系親族をめぐる領域で拡大していた。かつての「孝

子」は、父系親族集団についての記述の様式として浸透した、複数ある人間関係の表現の一形態にすぎない。現在の碑文の記載では、旧来の「孝子」のうちいくつかの要素を残しつつも、生活の共同性や生前の親密さに基づく解釈が加わることで、親族のうちの「親しい人々」を基軸に墓碑の記名範囲が形成されていることを分析した。

終章では、国家による画一的な「葬儀改革」が現在の多様性を生み出しているメカニズムを考察した。このメカニズムを理解する枠組みとして、社会的関節モデルの視座からの説明を試みた。

なお、補論として、改革途上にあった農村部における「土葬」時代の葬儀を示すことで、火葬以後の葬儀改革を相対化するため、2000年から2001年にかけて陝西省中部地域で観察した11件の葬儀についての報告を加えている。このことで、現在の中国における葬儀をより立体的に示した。

以上、本論文では、葬儀改革という新たな死の処理が形成され、普及してゆく過程を整理し、現代中国の葬儀改革がもつ画一性と多様性を理解するための枠組みを提示した。